

立命館の民主主義を考える会

ニュース 4号

(発行 2008 年 1 月 21 日)

【第 1 回フォーラムが成功し、「考える会」が結成されました！】

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」の結成集会と第 1 回フォーラムを 2007 年 12 月 22 日、衣笠キャンパス至徳館(元中川会館)で開催しました。

準備会では、当初、結成までに 30 名の賛同者を集め、フォーラムには 40~50 名の参加者を確保しようとして計画していました。しかし準備が進む中で、反響が大きく、近づくにつれて関心が高いことを痛感するようになりました。そこで、最終的には資料を 100 部用意することにし、70 名程度の参加であろうと判断しました。

当日は、ほぼ終日雨という最悪の天候でしたが、フォーラムが始まってまもなく座る席が足りなくなり、その後も参加者は増え続け、ついに資料もなくなって事務局メンバーの分を供出し、それでも足りなくてご迷惑をおかけすることになってしまいました。

フォーラムは、そのような熱気に包まれる中で進められ、フロアからも元教職員だけでなく、現役の教職員、さらに学生諸君の発言も得ることができました。この様子は近く報告書として公表する予定ですが、意見を率直に出し合うこのような機会を今後も続けていくことを約束して終了しました。

その後、結成宣言が朗読され、大きな拍手で確認することができました。「会」役職者として次のメンバーも承認されました。

代 表 芦田 文夫

副代表 佐々木嬉代三

顧 問 岩井 忠熊、戸木田 嘉久

終了後、カルムで懇親会がもたれ、予定を大幅に上回る人びとの参加によって和やかなひとときを過ごすことができました。

フォーラムの参加者は 116 名、懇親会参加者は 61 名で、「会」へのカンパを呼びかけたところ 242,000 円ものお金が集まりました。本当にありがとうございました。

なお当日資料をお渡しできなかった方で、まだお手元に届いていない方は世話人までご連絡ください。

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」結成宣言

「平和と民主主義」という教学理念は、戦前の反省を踏まえつつ、新しい時代の立命館を象徴する基本的精神として、脈々と受け継がれて参りました。幾度かの学園危機に際しても、この理念は学園を統一する上で大きな役割を果たすとともに、全学協議会方式をはじめとする民主的な学園運営の基本的制度として具体化されて参りました。

しかしながら、ここ数年、この伝統ある民主的な学園運営の原則が崩されてきているという声が、あちこちで聞かれるようになりました。なかでも、マスコミに報道された幾つかの出来事が、学園構成員の間に深刻な亀裂を招き、不信を広げていったと語られています。聞くところによりますと、一時金削減は教職員組合との十分な議論なしに強行され、前理事長・前総長への退任慰労金倍増は常任理事会を経ずに一般理事会のみで決められました。学園指導部の「専断」的なやり方が目に余り、「自由と清新」の気風が揺らぎつつあるように感じます。

私たちは、すでに退職した元教職員ですが、このような現状を黙視するに忍びません。民主主義を築く中心は、もちろん現役の教職員であり学生であります。しかし民主主義の危機に際しては、父母や校友をも含めて学園を愛する者たちが共に立ち上がる必要があると考えています。私たち退職教職員もまた、学園の民主主義を守り発展させる運動の一翼を担いたいと切実に願っています。

このような願いを込めて、ここに私たちは、「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」を結成します。現教職員や学生をはじめ立命館の民主主義の再生を望むすべての人びとと共に、語り合い意見を交わし、私たちにふさわしい行動を追求したいと考えています。

私たちは今後とも呼びかけ人を増やし、この趣旨に賛同する人をさらに多く結集していくつもりです。すでに私たちは自らの思いを「私の意見」として公表し、本日第1回のフォーラムを開催しました。こうした取り組みを今後とも粘り強く継続する決意です。継続は力です。焦ることなく慌てることなく、正々堂々と立命の未来を切り開こうではありませんか。

2007年12月22日

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

呼びかけ人(50音順)

[2007年12月20日現在]

芦田 文夫、荒川重勝、安藤 哲生、井上 純一、岩井 忠熊、小野 一郎、加藤 直樹、小檜山 政克、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 罔明、辻村 寛、友藤 信明、廣末 良子、宮澤 正男

賛同者(50音順)

[2007年12月20日現在]

朝日 稔、芦田 文夫、荒川重勝、安藤 哲生、伊藤 堅二、伊藤 武夫、井上 純一、岩井 忠熊、奥地 正、奥村 功、小野 一郎、笈 文生、香積 学、加藤 直樹、川上 勉、菊井 禮次、桑原 博昭、小檜山 政克、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 罔明、須田 稔、高木 彰、田中 宏道、辻村 寛、堤 矩之、戸木田 嘉久、友藤 信明、永原 誠、浪江 巖、廣末 良子、藤原 荘介、二場 邦彦、宮澤 正男、三好 正巳、森野 勝好、山口 幸二、山本 岩夫、和田 武

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」(略称「考える会」)には、「代表」、「副代表」をおくこととし、「顧問」をおくことができることにしたいと思います。「事務局」を設けると共に、「考える会」を支え

ていただくために、元教職員以外の方も含めて「世話人」をお願いする予定です。

「考える会」は、近くホームページをつくり、さまざまな連絡の統一的な場所を得たいと考えています。

「考える会」はできたばかりで、人的物的基盤がありません。元教職員に限らず、「考える会」の活動及び財政にご協力いただけるならば大変ありがたく思います。賛同される方、ご協力いただける方からの連絡は、当面、以下のところをお願いいたします。

井上 純一 jun-ichi@nike.eonet.ne.jp
加藤 直樹 nkato@pearl.ocn.ne.jp
佐々木嬉代三 kst01670@ss.ritsumeai.ac.jp
友藤 信明 n-t.o.m.o@hotmail.co.jp

廣末 良子 hirosue8@sepia.ocn.ne.jp
宮澤 正男 miyazawa_rits@yahoo.co.jp
事務局連絡先
Tel075-465-8200=Fax075-465-8201(組合)

【私の意見 5】

今の事態から何を学んだか—立命館での民主主義の再生を求めて—

井上 純一（2007年3月退職）

「従業員を大切にしない企業の経営者は、自分の力に酔っている」

「経営が悪くないのに一ヶ月もの賃金引下げを強行するような乱暴な会社は、ちょっとない」

「良いも悪いも、さすが立命館」

「私立大学にもっと国の金を寄越せといっている、その本人たちが、自分の腹を膨らませている。やっぱり私学は信用できん」

これは昨年、僕が定年退職をしたのを肴にして、幾つかの昔のゼミ生（卒業して間もない者から50に手が届く者まで、多くは民間企業やマスコミで、あるいはパートとして仕事をしている）が開いてくれた同窓会での卒業生や関西の研究者仲間の言葉である。「いや、いや、そうは言っても、ようガンバラはったんやで」と言ってみてはしても、「だからと言って・・・」と、斬り返される。もう恥じ入るばかりである。当人ではない僕が恥じ入ることはないのだが、つい姿勢がそうなる。

彼らの思いは、「あの」立命が「こんなことをするのか」あるいは「こんなことになるのか」という驚きである。「あの」というのは、「自由と清新」「平和と民主主義」を標榜し、民主的な運営システムを築き上げ、学生・教職員の力を積極的にすくい上げることによって学園発展の源泉としてきた、他の大学には真似ることのできなかつたことである。「こんなことをするのか」というのは、こうした「あの」立命が、他大学の教職員や世間的にも眉をひそめさせる行為をしたからであり、「こんなことになるのか」というのは、こういう無残な姿と、そういう風になることを許してしまった教職員への批判が含まれている。

そう、立命館がこれまで大事にしてきた教学の精神の一つである「民主主義」が、消え去りつつある。確かに「立命館民主主義」ともよばれてきたものは、そこそこでほころびをもっている。

「戦後民主主義」という言い方は、今や揶揄や時代遅れの意味さえ帯びるようになっているが、「民主主義」そのものは誰にとっても否定できないものになっている。「立命館民主主義」の中にも「戦後民主主義」の消極的中身はある。「リーダーシップとトップに責任と権限を！」と現在の学園トップの人たちが言うのは、戦後民主主義の、無責任体制ともなる平等至上主義への批判でもある。その点は謙虚にうけいれてもよい。何でも全ての人が同じようにするというシステムは、もう古いし非効率的でもある。制度疲労も起こしている。そこには責任と権限の適切な委譲があってしかるべきだ。しかし責任と権限を、彼もしくは彼女が果たすにあたって、その決断へのプロセスには民主主義が貫徹されねばならない。民主主義と、責任と権限の委譲とは対立しない。決断と実行の背後に民主主義的手続きと議論があれば、それは任せられるし、支えることもできる。どうもそうならないみたいだ。なぜなのだろう。

そのことが一番よく現われたのが、教職員の一時金カットであり、退任慰労金倍増支給である。民主主義が成り立つ土台は、道義と論理である。民主主義は単に数の力で決されるのではなく、いわんや問答無用的に決められるものではない。民主主義は、その前提に道義と論理が競われ、それによって個々の人の主体的な決断がなされるということから成り立っている。道義と論理なくしては、民主主義は民主主義として機能しない。否むしろ破壊される。立命館学園の教学改革の力となってきた全学協も、暴力を排除した論理と道義を基礎にしてなりたっている。一時金カットと退任慰労金は、このことを失っている。

一方では引き下げ、他方では引き上げ、一方では私学危機を考えると言い、他方ではそれをこれっぽっちも考慮しない、一方では他大学との比較はしないと張り、他方では設置形態をも無視して都合の良い比較で、これぐらいは当然だと言う。一方では父母の年収を考えるといい、他方ではそんなものは社会的にいろいろだから比較できないと言う。どこに論理性があるのだろうか。学問の府の長たちの論理とは、この程度のものなのか。

道義はどうだろう。経営者倫理を嘆く卒業生の言葉を借りれば「従業員には我慢を強いながら、経営者は甘い汁をすっている。」公費助成や社会的支援の増加を求めながら、その主張とは裏腹に個人的利得をこっそり腹に納めている、と普通の人々なら感じることをおこなっている。立命館大学の学費の重みを知っている者ならば、退任慰労金倍額の社会的道義性を主張することはできない。何人の学生が学生支援機構等の奨学金を借り、いかほどの借金を背負って卒業していくかに想いを少しでもはせるなら、社会的道義性があると言うのは、教職員なら恥ずかしい。企業とはことなる大学の経営者倫理とは、こういうことへ固執することだと思う。だから道義に欠けると僕は考える。

退任慰労金の額は多いと思う人もいるだろうし、当然だと思う人もいる。一時金カットも「まあ、しかたない」と思う人も不当だと思う人もいるだろう。道義と論理を無視すれば、額についてはいろいろ言える。問題は道義と論理である。大学だから一層このことが求められる。僕は一時金訴訟に賛同したが、どちらか一方だけだったら、賛同しなかっただろう。額の判断はむづかしい。しかし一時金と退任慰労金の両方があることで賛同する決心をした。道義と論理こそ、大

学で教育や研究に携わる者にとっては一番重要であり、それを失うことは、やがて教育や研究の自由をも奪われることに連なると感じるからである。僕は、学生たちにいつも論理的に考えて書き、そして自分のテーマの意味をいつも考えるようになってきたし、そうした論文や答案を求めてきた。大学で教鞭をとるほとんどの教員は、論理的な思考とテーマの社会的・人間的意味を学生に求めてきているはずである。この事態は、それを否定することになっている。道義や論理を自ら投げ捨てる、こうした事態を推し進める学園トップの人たちは、学生の論文や答案をどういう風に採点してきた（している）のだろうか、またどういう教育をすすめるようとしているのだろうか。まさか道義や論理を気にせず、その場しのぎの術を教え、学んでくれたら良いと思っているのではないだろう。

2006年7月、立命館憲章が制定されている。そこでは立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」（傍点筆者。以下同じ）であり、「教育・研究を通して信頼と連帯を育み」「私立の学園であることの特性を活かし、自主・民主・公正・公開・非暴力を貫き、教職員と学生の参加・・・のもとに学園の発展に努め」「正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成」をすると謳われている。傍点は全て、今の事態に照らしてみると、むなしく感じさせる。憲章はお題目であってはいけなしいし、民主的なポーズを示すだけのアリバイの言葉にさせてはいけなしい。それは、一步一步、教育や研究、業務や職務で前進させていくものである。それは、職場の中に、教職員の中に、経営と労働の中に、教育と研究の中に、実現させていくものである。教職員に時として重く感じさせた「立命館民主主義」は、ともかくも「平和と民主主義」の教学理念を実現していこうとする実践でもあった。それと同じように、立命館憲章を現実化させる作業は、立命館の民主主義を再生する道になるだろう。

機をみるに敏な、才気走った小官僚や戦略家の列には加わらない。愚鈍であっても誠実でありたい。「衆愚の政治」にもなりうる民主主義とは、そういうものだ。

【私の意見 6】

“前理事長（現相談役）の旭日重光章の受賞”などを憂う

宮澤 正男（2006年3月定年退職）

私が立命館大学に入学した1960年代後半から1970年代、学生および教職員の部落問題研究会が盛んになりし頃、「部落解放同盟」による立命館や京都の教育運動や民主運動に対する「差別糾弾」攻撃に抗するため、学生・教職員は大いに学習、議論したものである。現相談役もその一人で、学生課長から総務・財務担当常務理事を務めていた頃までは、「叙勲は人間を序列化するもので、問題がある」と強く批判をしていたものである。その後も、本学の元教授の叙勲に際しても、「国際連帯・平和運動に関わった者が、あんなもの欲しがるのか？」と揶揄していた。

そもそも「旭日重光章」なる叙勲制度は、明治8年「勲章従軍記章制定ノ件」（太政官布告第54号）が基になって始まったものである。そうしたことからGHQは日本の民主化を図るため、「公職追放」「国家神道の廃止」などととともに、生存者に対する叙勲は軍国主義の気風を復活させるものとして戦後一時停止していたのである。しかし、「もはや戦後は終わった」とか「『明治100年論』『戦後20年』など

の論調とともに、「高度経済成長」時代を背景に第3次池田内閣の時の1964年（昭和39年）から再開されたものである。

その後、明治から戦前の叙勲制度の印象が強かった「勲1等旭日大綬章、勲2等、・・・」と呼ばれていたものを、国民主権と相反するとの批判を背景に、2003年（平成15年）に7等、8等に該当するものを廃止し、現在の叙勲の名称に変更したものである。しかし、名称が変更されたといっても、明治以来の、かつて現相談役が批判した趣旨が変るものではあるまい。

現相談役は職員に対し、事あるごとに「現象面に目を奪われて、事の本質を見抜けないのはアホヤ！」と口癖のように云っていたものである。それが、数年前から「叙勲を欲しがる」気配を漂わせていたと聞くに及び、私は内示段階で断るだろう思っていたので信じられない思いであったが、まさか今回本当に貰うとは思わなかった。

11月3日の新聞発表以前に、朱雀キャンパスからの風の便りに聞くとところによると、相談役の脇にいる現理事長が古い意識感覚で「勲3等では話にならん、勲2等にさせるんだ！」と叫んで、某政治家に協力を求めたという事件が、内閣府（旧総理府）への推薦から内示打診の段階であったらしい。

現理事長が近い将来、自分が受賞するのを意識してか否かは知らないが、それが本当だとすると、「退任慰労金」を常任理事会に諮らずに、いきなり一般理事会で決めたのと同じように、相談役を誉める手法で自分への「退任慰労金」をも免罪する感覚ではないかと推測される。

長田理事長が「川本八郎・立命館相談役『旭日重光章』受賞にあたって」というタイトルでユニタス（2007.11.25号）に寄稿している。その文章の冒頭で「旭日章」の説明に、「1875年（明治8年）4月10日に制定され、“国家または公共に対し功労がある者”に対し授与されるものです。」と、戦前・戦後の時代区分の認識すら危惧される文章を、学園広報誌を使って恥じも外聞もなく紹介しているのである。そして、「今回の受章を、学園関係者一人ひとりの日々の奮闘が評価されたものとして受け止めていただき」たいとしているのである。

このことに見られるように、いくら言葉で「建学の精神」や「教学理念」を繰り返しても、空疎で空虚に響きます。平和と民主主義の教学理念に反する文章を書いても、まわりは何もいわない「裸の王様」の構造、組織された教職員の声を軽視する体質に、立命館学園は成り下がったのでしょうか。「裸の王様」の言行は、すべて当然「学園の生き残り」と評価を高めるものであり、教職員は結果について文句を言わず称賛せよと云わんばかりの、情けない文章が目にとります。（え！舌禍事件は取り上げたらきりが無い？それをそのままにしているのは、無責任でしょう。）

「学生のために」「学園のために」と云って、一方で教職員の賃金を連続9年もベア0、それに加えて一時金をカットし教職員の人心を離反させ、他方で自分らは自らの社会的評価を低下させた多額の「退任慰労金」を受け取る。（自分が獲得してきた寄付金に比べたら微々たる額との思いか？獲得出来るよう学園で奮闘していた教職員への思いはないのでしょうか？）

その「退任慰労金」から「学生のために」と云って慰労金の四分の一（何か意味のある額？）の特定寄付を行って（現相談役のみ）、更に学生・生徒に感謝の念を押し付け、感謝の集いの開催を強要する。訳が解りません。

現相談役（当時理事長）は大学に寄付を呼びかけるに際し、交渉の場などで「教職員より賃金が安い生協労働者が金額の多少はあっても90%近くの人が学園に寄付をしてくれている。墓場まで金を抱い

て逝く様なけちな人間になるな！みんなから尊敬される人間になれ！」と口をすっぱくして云っていた。その人は、今いずこに行ったのでしょうか？…。

ある人が、猿(秀吉)が武器と謀略をもとに天下を取り、養子縁組までして関白に登りつめたら、樹(天上)から降りられなくなって、晩年好き勝手なこと(刀狩りや朝鮮出兵等)をしたのと同様で、変質ではなく本質の悪しき現れだと評したが、権力者とはそういうものなのでしょうか？

年をとると、だれでも勲章が欲しくなるようで、現相談役と同じような態度は、作家の永井荷風や中曾根元首相にも見られる。辞退した人で有名なのは福沢諭吉らしい。(参照：インターネットで反社会学講座第23回“末は博士か叙勲者か---part 2”を検索してみてください。)

今年の年末・年始は義父の墓参りで外出した以外、家でゆっくりと過ごした。読売新聞(‘07.12.29)の1面下段の「編集手帳」の中に、こんな文章があった。「◆『読者とおまえ(夫人)と子供たち、それこそおれの勲章だ。それ以上のもの、おれには要らんのだ』作家城山三郎さん(享年79)は「勲章について」という詩に書いた。誰の胸にもその人だけの勲章がある◆作詞家、阿久悠さん(享年70)のお別れの会で、会場に飾られた詩が忘れがたい。『夢は砕けて夢と知り、愛は破れて愛と知り、時は流れて時と知り、友は別れて友と知り・・・』人それぞれに何かを知った年が暮れる。」

NHKで正月「民主主義」特集が放映された。今、世界でも民主主義が問われている。悪政に黙っていることは、黙認どころかファッショ体制に繋がると、銃剣の下でも「今日の一言が社会を変える、民主主義はまず行動すること」と、国民は生活改善と民主化を求めて起ち上がっている。

立命館でも働きがい、学びがいのある職場をめざして、粘り強く継続的に要求と声を上げましょう。自分が正しいと思うことを自由に言える、コミュニケーションとれた風土を築こう！

最近、組合員に配布された「京滋私大教連」の機関紙No.128号(2007.12.25)に、相談役もよくご存知の野中一也先生が「大学自治の力で 未来に展望を！～立命民主主義を考える～」というタイトルで提言をされている。私も民主主義を守るため、旗色を鮮明にする時期に来ていると思う今日この頃である。

最後に、叙勲を耳にしてエンゲルスの記した下記の『序論』を思い出した。イギリスの君主制を批判した文章であるが、これを日本の状況に置き換えて読み直しても、なるほどと頷ける。

※「イギリスのブルジョアジーには、今日にいたるまで自分たちの社会的地位についての劣等感が深くしみこんでいるので、彼らは自分の費用と国民の費用とで一つの装飾用の怠け者の階層を養っておき、いつでも国家的儀式にさいして国民をしかるべく代表してもらうのである。そして彼らのなかの一人が、結局は、彼ら自身がつくったものにほかならないこの選ばれた特権的集団にくわわる値打ちがあると認められれば、彼らはそれを自分たちの非常な光栄とみなすのである。」

*F・エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展—[英語版(1892年)への]序論』より

※(この文章を読んで、“飼犬に手を噛まれた”と憤慨するか、“ここまで成長したのか”と笑止するかで、その人の度量が知れよう)

「考える会」事務局員

フォーラムに出席して

匿名希望（現役職員）

12月22日はとても懐かしい先生方、諸先輩のお姿を拝見し、それだけでも感動でした。年末のお忙しいなか、学園を心配して遠方からもわざわざお集まりいただいたことに、現役職員は勇気付けられました。

みなさんのお話を伺うなかで、4年に一度の全学協や毎年の業務協議会が民主立命のバックボーンであったと改めて思います。今、学園のリーダーは「学生のための改革」と言いながら、学生の声に耳を傾けず、彼らの想いを踏みにじています。話し合い、ともに考えることは民主主義の基本ではないでしょうか。これでは学んだことが生き方につながりません。それを学生は怒っているのです。

私たちは誰もが生きいきと働き続けることができるように、教職員組合で活動してきました。よりよき職場造り、働き甲斐のある職場造りの原点は学生の成長です。いま、そのことが危ぶまれるような事態があります。先生方がお示しなされたように、おかしいことはおかしいと言う勇気を持って、仕事をしたいと思います。全国の隅々に広がっている「平和と民主主義」の立命館の名に恥じないように、これまでの先輩方の努力を思いながら、私たちも団結していきます。

ありがとうございました。

以上



12月22日のフォーラムの様子（116名の参加で大成功でした）



親睦会の様子